

心理障害，生活指導の研究

部 会 長

国立療養所鈴鹿病院

河 野 慶 三

〔心理障害〕

① 知 能

稲永ら（箱根）、桜田ら（八雲）は、Duchenne 型PMDにみられる言語性IQ、低下の要因を検討するために、ITPA（イリノイ式言語学習能力診断検査）を実施した。稲永らによるとDuchenne 型PMD者は、ITPAでみても暦年令より平均3.0歳の遅れがみられ、ことばの理解や絵の理解の得点は高いが、ことばの表現及び動作の表現の得点が低いことが特徴的であったという。

また、西村ら（南九州）は、ベントン視覚記銘検査を用いて、Duchenne 型PMD児と精神薄弱児の視覚面での総合能力の比較を行なった。両群間にみられた差は、精神薄弱群では正確数・誤謬数ともにIQにみあった変化を示すのに対し、PMD群ではこれらの値がかならずしもIQとよい一致を示さず、バラツキが大きいことにあるという。この結果は、低IQである点では類似していても、その構造は、PMD児と精神薄弱児では異なることを示唆したものと見えよう。

上記の3報告にもみられるように、PMD者の知能研究の焦点は、彼らの知能構造の分析と低IQ出現のメカニズムを解明していくことにあり、さらに多角的研究を必要としている。

② 要求水準検査の展開

要求水準検査法によるPMD者の行動特性の検討は、鈴鹿病院のグループにより継続的に行なわれている。

野尻ら（鈴鹿）は、従来の片カナ文字逆唱法（これを言語性検査とする）に加え、星形図形をtrace させる作業による動作性要求水準検査を考案し、言語性検査と動作性検査の結果を比較した。その結果、動作性検査は作業量の個人差が大きい、目標設定のしかた、設定した目標の達成の確かさともに言語性検査よりも優れていた。したがって、PMD者は本検査でもWISCの場合と同様、言語を介した目的行動に障害があることになる。

さらに、野尻ら（鈴鹿）は、言語性検査の経年変化についても報告した。初回検査から3年経過した時点での変化は、作業量の有意な増加、目標変動率、達成変動率ともに有意な減少の2点であった。このような方向への変化は、すでに報告した低年令患者と高年令患者の比較結果から十分予測されていたことであり、PMD者の加齢による発達が直接証明されたことになる。

ただ、初回検査にはみられなかった現象である目標差の(+)方向への偏りが、今回の検査では認め

られた。これは、杉田ら（南九州）の達成動機テストの結果とも合致しており、これらの結果の意味づけを明確にする必要ができた。

③ 精神生理学的研究

宮崎ら（鈴鹿）は、昨年にひきつづき作業負荷による心理的ストレスの影響を心拍数を指標として検討した。今回の検査では、前回に比べ心理的負荷を減少させたにもかかわらず、心拍数変化は鏡映描写時とかわらず、「慣れ」の現象も出現しなかった。同時に実施した動作性要求水準検査法の結果で達成変動率の低い群と高い群に分けてみると、達成変動率の高い群では心拍数の有意な増加が認められた。

一方、丸尾ら（長良）は、GSRを指標として、言語刺激がPMD者に与える影響を検討した。その結果、PMD者で病氣、死に関する語と日常よくきく語の間に反射量の差がみられたという。おそらく、PMD者が病氣・死に関することはに過敏な反応を示したということであろうと思われる。この研究もまだ始められたばかりであるので、さらに対象例を増し、PMD者の年齢差の問題も検討してほしいと考えている。

④ MMP I

昨年から継続されていたMMP Iの結果がまとめられた。この研究は、全国16施設33人の研究者の協力のもとに行なわれたもので、15～27歳の Duchenne 型PMD 166例のMMP Iプロフィールが分析された。平均プロフィールからみると、自己の身体への意識の固着、内向的、非現実的、非活動的心理状態にあることがPMD者の特徴と考えられ、同年健常者と比較すると、PMD者は抑うつ的であった。

⑤ その他

柿本ら（愛媛大学）は、一定の rating scale を用いて、PMD者の心理状態の精神医学的検討を行なった。その結果、10歳未満に入所したPMD者には、表情、接触性、言語的交流、行動様式の面で rating score の低い例がめだったという。われわれも、ホスピタリズムの問題を考え、若年者の入院は望ましくないと判断しているが、こうした問題に対する基礎資料として、さらに詳細な論文の発表を期待したい。

ところで、片山ら（鈴鹿）は、数値分配法を用いてPMD者の四肢のイメージの分析を行なった。これは、controlled study ではないので結論的なことは言えないが、PMD者は上下肢ともに形態よりも機能を重視した選択をしており、その傾向は障害が進行した群に顕著であったという。PMD者の body image を検討することの必要性については以前にも指摘したことがあるが、このような研究をさらに発展させていくことが大切である。

〔生活指導〕

生活指導の部門では、今年度の共同研究として“生活指導事例集”（B5版、66ページ）が刊行された。この中には17の事例が収載されているが、いずれも、“生活指導とは何か”“児童指導員の仕事とは何か”を考えるためのナマの素材として貴重なものである。PMD病棟に児童指

導員か保母がいることの意義は、いくら強調しても強調しすぎることはないと思自自身は考えている。しかし、PMD者を収容している病院の関係職員の間には、その重要性が十分認識されているとはいえないのが現状であるので、こうした地道な活動を自分達自身の手で続けていくことが不可欠であることを再度指摘しておきたい。

医師か看護婦などの“医療”スタッフは、どうしても患者の身体状況に関心が集中しやすい傾向があるので、児童指導員か保母などの“生活”スタッフは、それに歯止めをかける必要がある。その作業を支障なく遂行するためには、熱意や誠実さが必要であることはいうまでもないが、その基盤として、科学的方法で集積された確実なデータがなければ、その熱意は空転してしまうことを十分に認識しておくべきであると思うのである。

児童指導員を中心とする人々との3年間の共同研究は一応これで終るが、医師では彼らの代弁者にはなりえないこと、かといって彼らが自分達の意志を十分に表現できるところまで到達しているとは言えないことの2点を併記しておくことにしたい。このように中途半端な状態にあることは確かであるが、彼らが患者の care の面で果している役割は大きいので、今後の研究活動では、少なくとも生活指導の部門は、彼らの代表に任せてもいいのではないかと考えている。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

〔心理障害〕

知能

稲永ら(箱根)、桜田ら(八雲)は、Duchenne 型 PMD にみられる言語性 IQ、低下の要因を検討するために、ITPA(イリノイ式言語学習能力診断検査)を実施した。稲永らによると Duchenne 型 PMD 者は、ITPA でみても暦年令より平均 3.0 歳の遅れがみられ、ことばの理解や絵の理解の得点は高いが、ことばの表現及び動作の表現の得点が低いことが特徴的であったという。